

育児期男性の生活スタイルと自己の生き方への認識

仕事・家庭・個人的活動へのエネルギー投入バランスの異なる3タイプの比較

鶴川女子短期大学	大野 祥子
郡山女子大学短期大学	平山 順子
文京学院大学	柏木 恵子

The relation of men's life style and the evaluation of their own life A comparative study of 3 types according to investment to their job, family life, and personal amusement

Tsurukawa Women's Junior College	OHNO, Sachiko
Koriyama Woman's University Junior College Division	HIRAYAMA, Junko
Bunkyo Gakuin University	KASHIWAGI, Keiko

本研究の目的は、仕事と家庭生活の両方にコミットすることが男性にとってどのような意味があるのかを検証することである。3-4歳児を持つ男性391人の生活スタイルを3つのタイプに分類し、自己の生き方に対する認識を比較した。仕事中心の「3.社会メイン型」、家庭と仕事に均等にエネルギーを投入する「7.家庭=社会型」、仕事は半分で家庭生活にも個人的活動にもコミットしたい「1.社会が半分型」の3タイプ中、「3.社会メイン型」の「不安・焦燥」が若干高く、家族と気持がつながっていると感じられるかどうかと関連していた。「7.家庭=社会型」は「共同参画」への賛同が最も高く、価値観に支えられて家庭役割を主体的に引き受けている群と考えられ、現実の生活スタイルと理想のずれが最小であった。「1.社会が半分型」では稼ぎ手役割の責任の自覚が「不安・焦燥」と関連していると考えられた。

【キー・ワード】 育児期男性, 生活スタイル, 仕事・家庭・個人的活動へのエネルギー投入, 自己の生き方に対する認識, 不安・焦燥

The purpose of this study is to investigate effects of the commitment to job and family life on men's evaluation of their own life. Subjects were 391 married men having a 3-4 year-old child. According to the ratio of investments to their job, family life, and personal amusement, 3 types of life style were classified. Results of ANOVA showed that the score of "uneasiness to his aimless life" was slightly higher in the "job-main type" than the "job-half type" and the "job=family type." Emotional commitments with family were negatively correlated with their uneasiness in the "job-main type". Men of the "job=family type," who showed the highest agreement with <gender equality> of the 3 types, can be regarded as voluntary family men. The gap between ideal and

real life styles in that type was also the smallest of the 3, which implies positive effects of the commitment to family. In the “job-half type,” it is considered that “uneasiness to his aimless life” may be related with their awareness of breadwinner role.

【Key Words】 Men of child-rearing stage, Life style, Investment to job, family life, and personal amusement, Evaluation of one's life, Uneasiness to one's aimless life

問 題

高度成長期に始まる産業構造の変化は、労働力の女性化やテクノロジーの進歩をもたらし、女性の社会進出や男性の家事参加の可能性を増大させた。また、少子・長寿命化によって人間の人生における「余生」が延長したことによって、「男性が働いて家族を養い、女性が家事育児を担う」という性別分業システムはすでに最適性を失ったとされる。長い人生の先を見通して、生活防衛を図り、生きがいを得るためには、男女は性別役割の境界を越えて従来の異性役割にコミットし、さらに個人としての自己実現を追求するようになると予想されている(柏木,1999; 落合, 1997; 大野,2001 ほか)。

このうち女性が職業を持つことについては、多くの研究が肯定的な効果を見出している。例えば柏木(2003)における女性の就業形態による「個人としての自己実現尺度」の比較では、「不安・焦燥」「自己依拠」の2因子で就業形態の主効果が認められ、フルタイム群の女性は専業主婦群、パートタイム群の女性より「不安・焦燥」が低く、「自己依拠」が高いことが明らかになった。また土肥・広沢・田中(1990)でも、仕事を持つ主婦である「多重型」の女性は、専業主婦である「家庭型」や独身の「就業型」の女性よりも役割過負荷感が高いが、同時に生活満足感も高いことを報告している。反対に、専業主婦が自らの生き方に焦燥感を抱いているという報告も多い(例えば、朝日新聞社会部,1999; 永久,2003 など)

一方、男性が従来は異性役割とされた家族役割に関与することの意味については、子育て経験が親としての人格の変化や成長をもたらすという育児領域に焦点を絞った研究(新谷・村松・牧野,1993; 柏木・若松,1994 など)や、夫の家事分担が妻の不公平感を低下させ(岩間,1997)、夫婦関係満足度を高める(末盛・石原,1998; 諸井,1996)という夫婦関係の質への影響を扱った研究は散見される。また、共働きの夫も専業主婦の夫も、仕事役割から家庭役割への悪影響(ネガティブ・スピルオーバー)が抑うつ度と関連することが報告されている(福丸,2003)。しかし、毎日の生活における仕事と家庭のバランスが、男性の自分の生き方に関する認識にどのような効果をもたらすかを直接に検討した研究はほとんどない。

本稿では、社会的活動・家庭生活・個人的活動という生活の3側面へのエネルギー投入割合を基に、育児期男性の生活スタイルのタイプを抽出し、それぞれのタイプに属する男性が自分の生き方についてどのような認識を持っているかの比較を行う。従来男性の役割とされた社会的活動=仕事と、従来は女性の領域とされた家庭生活へのコミットメントのバランスが異なる典型的な3タイプを取り上げ、異性役割へのコミットメントが男性の心理に与える影響を検討することが目的である。

なお、「生活スタイル」とは、エネルギー投入割合によって記述される、従来の男性役割と女性役

割,また性別役割を離れた個人としての活動に対する志向性のバランスと定義する。エネルギー投入という抽象的な質問に基づいて構成される概念ではあるが,後述するように生活の実態とも対応しており,価値観と行動の両方の次元を含むと考えられる。

方 法

(1) 調査の概要

この調査は平成12年度-平成14年度文部省科学研究費補助金によるプロジェクト「社会変動・家族・個人の発達に関する発達・文化心理学的研究(研究代表者 柏木恵子)」の一部として行われた。調査対象には,大学生の子どもを持つ中年期世代と3~4歳児を持つ育児期世代の2つのサンプルが含まれたが,本稿では育児期世代のサンプルのみを分析対象とする。その理由は,子どもが成長し,独立していく家族サイクルにあたる中年期サンプルでは家族のコミュニケーションのとり方や家庭生活の運営のしかたが多様化していると考えられ,職業生活と家庭生活のバランスを扱う分析対象として適さないと考えたためである。

都市部(東京,神奈川)および愛知県内の幼稚園,保育園計10カ園で,3~4歳児の両親を対象とした質問紙調査を行った。質問紙は返信用封筒を添え,園児を通して配布し,後日園児を通して回収した。調査時期は2001年5月~7月にわたった。

データの配布数は10カ園あわせて1147通。うち,回収父親データは540通(回収率47%),母親データは628通(回収率55%)であった。夫婦の回答が揃っており,かつ夫婦が同居しているのは522ケースであった。

(2) 質問紙の構成

「生活意識に関する調査」と題した質問紙を配布した。質問紙全体の内容は,大野・田矢・柏木(2003)を参照されたい。本稿では扱うのは,主として以下の項目・尺度である。

家庭・仕事・個人的活動に対する現実のエネルギー投入割合

「あなたは『家庭』・『社会的活動(仕事,学校,ボランティアなど)』^(注1)『自分個人のための活動(趣味,睡眠など)』のそれぞれに対して,現実にどのくらいのエネルギーを投入していると思われますか。全体を10として,割合をお答えください」という質問に,3つの数字の比の形で回答を求めた。

家族役割分担

大野・菅野・柏木(2002)で作成した,家族役割の分担のしかたに関する尺度。家庭内で必要とされる様々な役割を,炊事や洗濯等の「家事」,大きな出費や日常の家計の管理に関する「家計管理」,家族メンバーに対する情緒的なケアに関する「情緒」,稼ぎ手役割としての「生活費を稼ぐ」の4領域に分類した。本稿では,さらに「育児」を加え,5領域の家族役割について,夫婦間での分担比率を求めて,分析に加えた。

家族観尺度

大野・田矢・柏木(2003)で用いた家族に関する価値観を測定する尺度。性別分業を肯定する「性別分業」、家族は行動を共にするのがよいとする「凝集性」、性別や立場によらずできる者が役割を分担すればよいとする「共同参画」の3つの下位尺度を含む。下位尺度得点はそれぞれ1点～5点の範囲をとり、得点が高いほどその価値観に賛同する程度が高いことを示す。

個人としての自己実現尺度

「自分の人生に対して肯定的な認識・感情を持ちえているかどうか」の指標として、柏木(2003)のプロジェクトで作成し使用された「個人としての自己実現尺度」を用いる。この尺度は「自分が感じる欲求の充足、及び自分が抱く価値の実現のために行動することを優先し、それによって個人としての自分あるいは自分の人生に対して、肯定的な認識・感情を持っている状態」と定義される「個人としての自己実現」を測定するための尺度である。自分の欲求や価値観に従って行動する」という行動次元での自己依拠の程度と、自分の生き方に対する意識・感情次元での認識の両方を含む18項目から成る。因子分析(主因子法・プロマックス回転)によって、自分の人生はこのままでいいのかという不安や焦りを感じていることを表す「不安・焦燥」、自分の信念に従って行動しているという認識を表す「自己依拠」、人と一緒に行動することで安心する「集団志向」の3因子が抽出された。因子パターン行列は附表1に示す。因子間の相関は「不安・焦燥」と「自己依拠」の間に-.59の負相関が見られたが、「集団志向」は他の2因子とは無相関(いずれも.00)であった。因子パターンは比較的単純構造を示したので、各因子に負荷の高い項目の粗点を平均して、1点～5点の範囲をとる下位尺度得点を算出した。

なお本稿では因子間相関が低く信頼性もやや低かった「集団志向」を除き、「不安・焦燥」と「自己依拠」の2得点を分析に使用する。

(3) 予備的分析 男性の生活スタイルのタイプ分類

柏木(2003)では、「家庭生活」「社会的活動」「個人的活動」の3側面に対する現実のエネルギー投入割合について、本調査の全サンプルのうち当該項目に欠損のなかった中年期男性143名、育児期男性514名、計657名を対象にクラスター分析(Ward法)を行った。5～8クラスターで、3領域へのエネルギー投入割合の平均とSDを求め、クラスターごとに生活スタイルの特徴が明確で説明しやすいと考えられた7クラスターを採用した。7クラスターそれぞれに生活スタイルを表すタイプ名をつけた。各クラスターの特徴(3領域へのエネルギー投入割合)と世代ごとの分布は附表2に示す。

本稿では7つのタイプ(クラスター)のうち、社会的活動＝仕事と家庭生活へのエネルギー投入バランスの異なる「1.社会が半分型」「3.社会メイン型」「7.家庭＝社会型」の3タイプに分類された育児期男性について比較・分析を行う。分析対象者の人数は、「1.社会が半分型」が159人、「3.社会メイン型」が161人、「7.家庭＝社会型」が71人、合計391人である。

結 果

(1) 生活スタイルの3タイプの特徴と属性

タイプごとの3側面への現実のエネルギー投入割合を図1に、生活スタイルのタイプを要因とする分散分析の結果を表1に示す。

「1.社会が半分型」は、エネルギーの半分強を仕事に投入し、次いで家庭生活に2~3割、個人的活動にも1~2割のエネルギーを割いている。一家の稼ぎ手として生活の中心は仕事であるが、家庭へもそこそこコミットしつつ、他の2タイプと違って一人の活動も楽しんでいる点が特徴である。

「3.社会メイン型」はエネルギーの7~8割を仕事に注いでいる「仕事人間」である。「エネルギー投入」という抽象的な質問への回答が、そのまま時間として読み替えられるものではないが、趣味を楽しむ余裕はあるか、家族とゆったり過ごすことができるのかどうか危ぶまれるスタイルと言えよう。

仕事と家庭生活のバランスに注目すれば、上記2タイプは、どちらも家庭生活より仕事にはるかに多くのエネルギーを振り向けているという点で、仕事=稼ぎ手役割中心の生活スタイルである。数の上ではこの2タイプに属する男性が最も多く、本調査の育児期男性の全サンプル540人の内でも59.3%を占めていた。

それに対して「7.家庭=社会型」は、エネルギーのほとんどを仕事と家庭生活とに均等に二分する生活スタイルをとる。仕事へのエネルギー投入割合は他の2タイプより有意に低く、家庭生活への投

図1. 生活スタイルの3タイプごとの現実のエネルギー投入割合

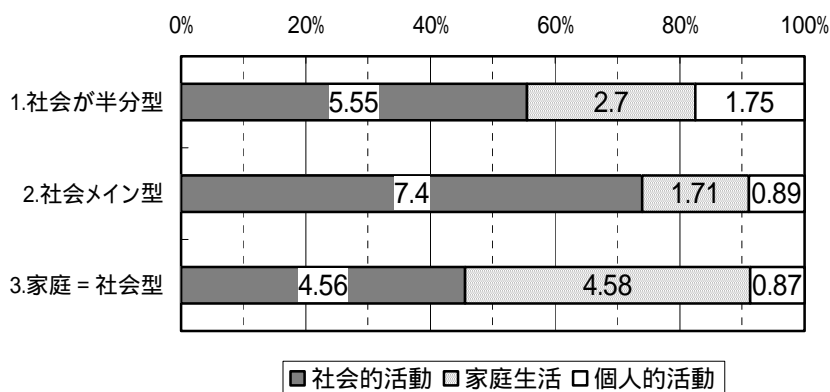


表1. 現実のエネルギー投入割合 (SD) 生活スタイルのタイプ間比較

	1.社会が半分型	3.社会メイン型	7.家庭 = 社会型	統計的有意差
社会的活動	5.55 (.65)	7.40 (.64)	4.56 (.64)	F=584.16 *** 7 < 1 < 3
家庭生活	2.70 (.70)	1.71 (.65)	4.58 (.65)	F=454.53 *** 3 < 1 < 7
個人的活動	1.75 (.68)	0.89 (.52)	0.87 (.34)	F=109.30 *** 3, 7 < 1

*** p<.001 ** p<.01 * p<.05 + p<.10 (以下の表も同様)

入割合は最大である。個人的活動に対する投入割合も低いことから、一人で息抜きをする機会を持っているという自覚はないことがわかる。少なくとも意識の上では、家庭を妻任せにせず、仕事と家庭のバランスをとって両立させることを目指しているタイプと言えるだろう。

表2は、3つのタイプの社会的属性をまとめたものである。

どのタイプでも約3/4の夫が民間企業勤務のサラリーマンであり、妻の7割前後が専業主婦であった。「7.家庭 = 社会型」に若干、三世同居が多いように見えるが、カイ二乗検定の結果は有意ではなかった。都市部か地方かという居住地の分布にもタイプによる差は見られなかった。父親の育児への関わりが都市部より郡部が高いのは、妻の就業や父親の勤務形態、家族形態等の属性に地域差があるためとする報告があるが(福丸,1997)、ここでは基本的な属性に関して、タイプ間で目立った差異は見られなかった。

表2. 生活スタイルの3タイプごとの社会的属性

	男性の生活スタイルのタイプ			統計的 有意差
	1.社会が半分型	3.社会メイン型	7.家庭 = 社会型	
平均年齢(SD)				
夫	36.4 (4.37)	35.8 (4.38)	35.3 (5.03)	F=1.54 n.s.
妻	33.7 (3.94)	33.1 (3.97)	32.8 (3.94)	F=1.50 n.s.
平均結婚年数(SD)				
	8.2 (2.9)	7.8 (2.55)	7.4 (3.06)	F=2.24 n.s.
平均子ども数(SD)				
	1.96 (.73)	1.98 (.66)	2.17 (.77)	F=2.28 n.s.
夫の仕事内容 度数(%)				
家業・自営	11 (7.0)	14 (8.8)	10 (14.1)	X ² =11.50 n.s.
専門職	8 (5.1)	9 (5.6)	1 (1.4)	
公務員・教員	8 (5.1)	7 (4.4)	4 (5.6)	
民間の企業	119 (75.3)	123 (76.9)	53 (74.6)	
自由業	3 (1.9)	0	0	
パート/アルバイト	0	1 (.6)	0	
その他	9 (5.7)	6 (3.8)	3 (4.2)	
妻の就業形態 度数(%)				
専業主婦	94 (67.1)	97 (70.8)	41 (68.3)	X ² =1.17 n.s.
パート	22 (15.7)	17 (12.4)	7 (11.7)	
フルタイム*1	24 (17.1)	23 (16.8)	12 (20.0)	
夫婦の学歴組み合わせ 度数(%)				
夫高校 - 妻高校	29 (27.6)	32 (29.6)	18 (41.9)	X ² =4.00 n.s.
夫大学 - 妻高校・短大	53 (50.5)	56 (51.9)	20 (46.5)	
夫大学 - 妻大学	23 (21.9)	20 (18.5)	5 (11.6)	
家族形態 度数(%)				
三世同居家族	26 (16.4)	23 (14.3)	17 (23.9)	X ² =3.33 n.s.
核家族	133 (83.6)	138 (85.7)	54 (76.1)	
地域 度数(%)				
都市部	49 (30.8)	46 (28.6)	21 (30.0)	X ² = .20 n.s.
地方	110 (69.2)	115 (71.4)	49 (70.0)	

*1 週あたり35時間以上働くパートを含む

(2) 生活スタイルと生活実態の対応

では、「エネルギー投入割合」という抽象的な尋ね方から抽出された生活スタイルは、生活の実態とどのように対応しているのだろうか。仕事へのコミットメントの指標として、週あたりの労働時間と年収、家庭生活へのコミットメントの指標として、夫の家族役割分担割合をについて、タイプによる比較を行った。結果を表3に示す。

仕事へのコミットメントの指標となる労働時間は、エネルギーの投入割合から予想されるとおりの有意差が見られた。通勤時間を含め、最も長く仕事に時間を費やすのが「3.社会メイン型」であり、逆に最も短いのが「7.家庭=社会型」であった。労働の対価である年収額の差は、モデル全体で見ると10%水準の有意傾向が見られたものの、労働時間の差ほど明らかではない。ここで分析に用いた年収の額は、「1:収入はない」から「13:1,600万円以上」までの13段階のうちから1つ選択された回答カテゴリーに階級値を代入して算出した概算額である。労働時間は明らかに長いのに年収額には顕著な差が見られない原因としてはサービス残業の可能性が考えられる。「3.社会メイン型」の男性の、職場への忠誠心、あるいは仕事に絡め取られている状況がうかがえる。

表3. 生活スタイルと生活実態の対応

	男性の生活スタイルのタイプ			統計的有意差
	1.社会が半分型	3.社会メイン型	7.家庭=社会型	
仕事へのコミットメント				
平均労働時間/週 (SD)	63.9 (12.72)	70.8 (15.88)	57.2 (12.92)	F=24.05 *** 7 < 1 < 3
平均年収*1 (単位:万円)	677.7 (298.44)	695.4 (260.64)	608.8 (206.8)	F= 2.55 +
家庭へのコミットメント				
夫の自己評定による分担割合(SD)				
「家事」分担割合	.86 (1.00)	.67 (.99)	1.21 (1.38)	F=6.29 ** 1, 3 < 7
「家計管理」分担割合	2.30 (2.48)	2.28 (2.47)	2.34 (2.46)	F= .02 n.s.
「情緒」分担割合	3.41 (1.53)	2.84 (1.53)	3.49 (1.52)	F=7.25 ** 3 < 1, 7
「生活費を稼ぐ」分担割合	9.11 (1.53)	9.28 (1.41)	8.65 (2.16)	F=3.65 * 7 < 3
「育児」分担割合	3.23 (1.18)	2.54 (1.10)	3.56 (1.11)	F=24.81 *** 3 < 1, 7
妻の評定による分担割合				
「家事」分担割合	.67 (.97)	.49 (.77)	.85 (1.18)	F=3.88 * 3 < 7
「家計管理」分担割合	2.17 (2.52)	2.10 (2.29)	2.41 (2.73)	F= .39 n.s.
「情緒」分担割合	2.56 (1.51)	2.38 (1.38)	2.80 (1.65)	F=2.02 n.s.
「生活費を稼ぐ」分担割合	9.07 (1.73)	9.13 (1.77)	8.62 (2.22)	F=2.01 n.s.
「育児」分担割合	3.08 (1.32)	2.62 (1.17)	3.15 (1.30)	F=7.01 *** 3 < 1, 7
同席者別の生活時間(SD)				
平日, 家族と一緒に	3.3 (1.61)	2.7 (2.16)	4.3 (2.69)	F=14.13 *** 1, 3 < 7
休日, 家族と一緒に	12.5 (3.40)	12.5 (3.49)	13.1 (3.85)	F= .73 n.s.
平日, 家族以外の誰かと一緒に	9.8 (3.86)	10.6 (3.86)	8.6 (4.20)	F= 5.92 ** 7 < 3
休日, 家族以外の誰かと一緒に	1.1 (2.39)	.7 (2.29)	1.2 (2.83)	F= 1.31 n.s.
平日, 一人で(睡眠を除く)	2.6 (2.82)	1.7 (2.11)	1.5 (1.93)	F= 7.53 *** 3, 7 < 1
休日, 一人で(睡眠を除く)	2.1 (2.38)	1.6 (1.80)	1.2 (1.81)	F= 4.26 * 7 < 1

*1 平均年収は、1:収入はない、2:30万円未満、3:30～50万円未満、4:50～100万円未満、5:100～200万円未満、6:200～400万円未満、7:400～600万円未満、8:600～800万円未満、9:800～1,000万円未満、10:1,000～1,200万円未満、11:1,200～1,400万円未満、12:1,400～1,600万円未満、13:1,600万円以上、という回答カテゴリーに、階級値を代入して平均を算出した。

一方、家庭へのコミットメントの指標とした家族役割分担は、男性の自己評定では「家計管理」以外の4領域でタイプ間の有意差が見られた。稼ぎ手役割の分担度が「3.社会メイン型」で高かった他、家事や育児、情緒に関する領域は全て「7.家庭＝社会型」の分担率が最高であった。妻による評定は本人よりやや厳しいが、「家事」「育児」など行動を伴う領域ではやはり「7.家庭＝社会型」の夫の貢献が最も認められている。このタイプの男性は、現実の行動面でも日々の家庭内の切り盛りに関わっていることがわかる。

誰と一緒に過ごしたかを尋ねた同席者別の生活時間では、やはり「3.社会メイン型」は平日に家族以外の誰か 仕事関係の人と考えられる と過ごす時間が他の2群より長く、「7.家庭＝社会型」は平日に家族と過ごす時間が最も長い。また、「1.社会が半分型」は平日休日ともに、1人で過ごす時間が3タイプの内が一番長く、「個人的活動への投入が比較的高い」というこのタイプの特徴が、時間の上でも確認された。

表3の結果から、「エネルギー投入割合」という抽象的な質問から抽出した生活スタイルのタイプは、行動面の特徴と対応していると言えるだろう。

(3) 生活スタイルの理想と現実はどうにずれているか

図2は、現実のエネルギー投入割合を尋ねたのと同様に、3側面に対する理想のエネルギー投入割合を答えてもらった結果についてのタイプごとの平均である。それぞれのタイプの理想の生活スタイルを示している。タイプ間の比較をした分散分析結果を表4に、タイプごとに理想と現実を比較した対応のあるt検定の結果を表5に示す。

表2は現実の生活スタイルのタイプによって、理想の生活スタイルが異なるかどうかの比較である。やはり「3.社会メイン型」は他の2タイプより仕事への志向性が強く、家庭生活や個人的活動への志向は低いことがわかる。ただし、仕事と家庭生活のバランスという点では、現実と比べて仕事への比重がかなり低くなっている。自分のエネルギーのほとんどを仕事に吸い取られている生活の現状は理想ではなく「心ならずも」であることを示している。

図2. 生活スタイルの3タイプごとの理想のエネルギー投入割合

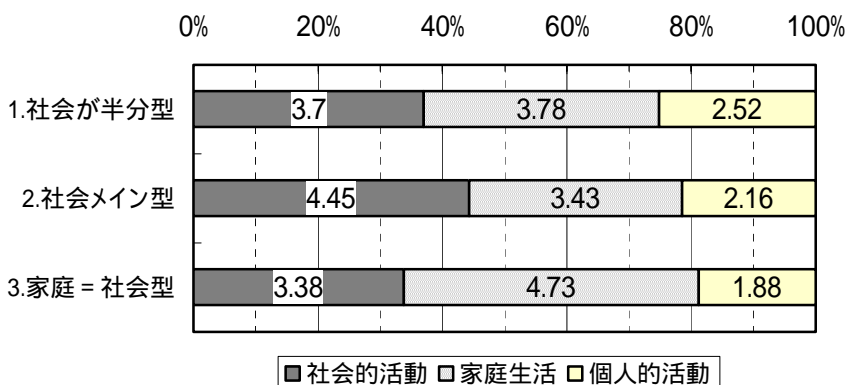


表4. 理想のエネルギー投入割合 生活スタイルのタイプ間比較

	1.社会が半分型	3.社会メイン型	7.家庭 = 社会型	統計的有意差
社会的活動	3.70 (1.14)	4.45 (1.40)	3.38 (1.11)	F= 23.47 *** 1, 7 < 3
家庭生活	3.78 (.99)	3.43 (1.04)	4.73 (1.13)	F= 38.49 *** 3 < 1 < 7
個人的活動	2.52 (1.01)	2.16 (1.21)	1.88 (.90)	F= 9.59 *** 3, 7 < 1

表5. 生活スタイルのタイプごとに見た理想と現実のエネルギー投入割合の比較

		現実	理想	t値
1.社会が半分型	社会的活動	5.55 (.65)	3.70 (1.14)	t=-12.53 ***
	家庭生活	2.70 (.70)	3.78 (.99)	t= 18.30 ***
	個人的活動	1.75 (.68)	2.52 (1.01)	t= -8.86 ***
3.社会メイン型	社会的活動	7.40 (.64)	4.45 (1.40)	t=-21.32 ***
	家庭生活	1.71 (.65)	3.43 (1.04)	t= 26.66 ***
	個人的活動	0.89 (.52)	2.16 (1.21)	t=-13.92 ***
7.家庭 = 社会型	社会的活動	4.56 (.64)	3.38 (1.11)	t= -1.19 ns
	家庭生活	4.58 (.65)	4.73 (1.13)	t= 9.15 ***
	個人的活動	0.87 (.34)	1.88 (.90)	t=-10.38 ***

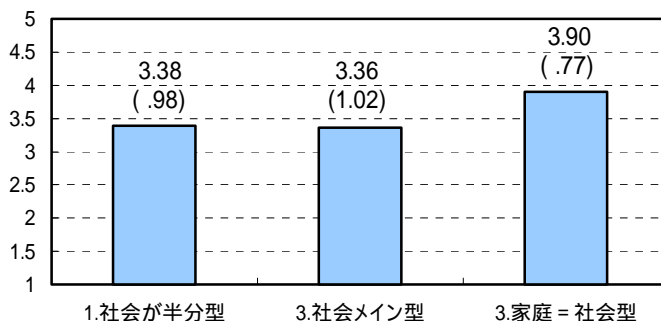
「1.社会が半分型」も、仕事に投入したい理想のエネルギーの割合は、現実より低くなっている。仕事と家庭生活とのバランスは、ほぼ均等であることを理想としているが、個人的活動にもエネルギーを振り向けたいとしている点が、「7.家庭 = 社会型」と異なる。

「7.家庭 = 社会型」は、理想的には仕事よりも家庭生活の方により多くのエネルギーを傾けたいとしている点が特徴的である。また表3に示されたように、このタイプの家庭生活に関してのみ、理想と現実の間に有意差が見られなかった。家庭に深くコミットするこのタイプの生活スタイルは、「必要に迫られて」とか「仕方なく」といった消極的理由から生じるものではなく、自らの理想を体現したものであることがわかる。

100点満点での採点を求めた「仕事に対する満足度」のタイプ間比較でも有意差が見られなかったことから (F= .20, p=.816), このタイプが仕事へのエネルギー投入が低いことに対して家庭生活からの仕事へのネガティブ・スピルオーバーを感じているわけではないと推測できる。さらに、家族に関する価値観のタイプ間比較では、「共同参画」の得点が3タイプ中で最も高いことから(図3; F=8.76, p=.000; 多重比較の結果は 1, 3 < 7), 「7.家庭 = 社会型」の男性は、「性別に関わりなく、家事や育児は夫婦が共に担うべきだ」という価値観を持ち、それを実践していながら生活している人たちと言える。

なお、理想と現実のずれを量的に検討するために、「社会的活動」「家庭生活」「個人的活動」それぞれについて、理想から現実を引いた差を求め、その絶対値を合計した「ずれの大きさ」の得点を算出した。タイプごとの「ずれの大きさ」の平均(SD)は、「1.社会が半分型」が 4.01(2.34), 「3.社会メ

図3. 生活スタイルのタイプごとの夫「共同参画」の平均(SD)



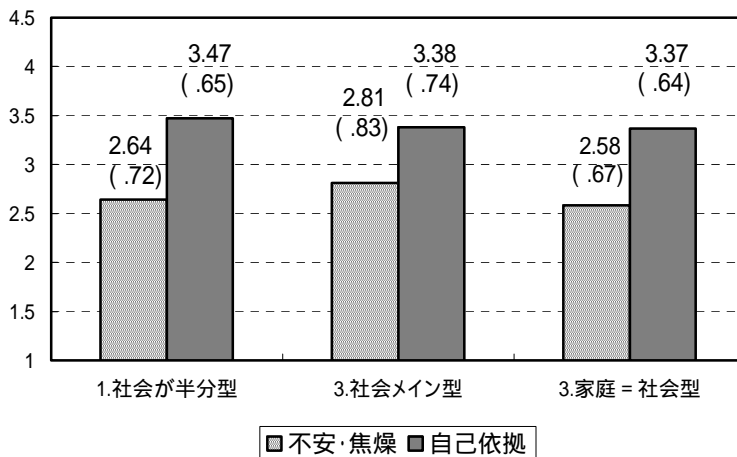
イン型」が6.00(2.75)、「7.家庭 = 社会型」が3.07(1.76)であった。タイプを要因とする一元配置の分散分析を行ったところ、 $F=45.51(p=.001)$ 、多重比較の結果は全てのタイプ間に有意な差が認められた。「現実の生活は、自らの理想からどの程度隔たっているか」を量的に見ても、「7.家庭 = 社会型」が最も理想に近く、「3.社会メイン型」が最も理想から遠いことが示された。

(4) 自己実現との関連

では、これら3タイプの男性たちは、自分の人生や生活の現状についてどのように感じているのだろうか。「個人としての自己実現尺度」の2つの下位尺度得点、「不安・焦燥」と「自己依拠」の得点をタイプによって比較した結果が図4である。

「不安・焦燥」は $F=3.02$ 、 $p=.050$ で有意な値を示した。多重比較を行うと群間に有意差が見られるレベルではないものの、平均値からは「3.社会メイン型」の「不安・焦燥」が他の2群より若干高いことが読み取れる。「自己依拠」の得点にはタイプによって有意差は見られなかった($F=.879$ 、 $p=.416$)。

図4. 生活スタイルのタイプごとの「不安・焦燥」「自己依拠」の平均(SD)



有意差が見られたとはいえ、そもそも「不安・焦燥」の得点自体は、どのタイプでも特に高いわけではない。しかし「不安・焦燥」「自己依拠」と他の変数間の相関関係は、生活スタイルのタイプによって異なる傾向を示していた。相関関係にあるということは、不安の原因を特定するものではないが、自分の生き方に対するポジティブな感覚や捉えどころのない不安が、どのような次元と結びついているのかを見ることで、それぞれのタイプの男性がどのような価値・意味の空間に生きているのかをうかがい知ることができる。

3つのタイプに共通して現われたのは、「仕事に対する満足度」^(注2)が「不安・焦燥」と負相関、「自己依拠」とは正相関を示すパターンであった。仕事への精神的な投資の程度はタイプによって異なるが、職業を持つ者なら誰もが一日のうち多くの時間を割くことになる「仕事」に満足できるかどうかは、自分の生き方に対する認識・感情との関連があることがわかる。

表6. 生活スタイルのタイプごとに見た「不安・焦燥」「自己依拠」との相関

	1.社会が半分型		3.社会メイン型		7.家庭 = 社会型	
	不安・焦燥	自己依拠	不安・焦燥	自己依拠	不安・焦燥	自己依拠
仕事に対する満足度*1	-.480 ***	.268 ***	-.478 ***	.392 ***	-.315 **	.290 *
家庭生活に対する満足度*1	-.169 *	.112	-.198 *	.125	-.188	.242 *
夫から見た夫婦関係の調和度(MDA)	-.241 **	.144	-.373 ***	.248 **	-.031	.259 *
妻から見た夫婦関係の調和度(MDA)	-.186 *	.072	-.166 *	.103	-.089	.068
夫の労働時間 / 週	-.071	.108	-.062	.016	-.151	-.103
夫の年収額	-.222 **	.218 **	-.022	-.034	-.204	.088
妻の労働時間 / 週	-.267 *	.104	.139	-.270 *	-.051	.156
妻の年収額	-.398 ***	.416 ***	.098	-.156	.109	-.240
「家事」分担割合*3	-.097	.136	.100	-.120	.128	-.025
「家計管理」分担割合*3	-.077	-.042	-.016	.014	-.057	.249 *
「情緒」分担率*3	-.101	.153	-.185 *	.172 *	.056	.339 **
「稼得」分担割合*3	.089	-.082	-.084	.096	-.094	-.073
「育児」分担割合*3	.002	.031	-.083	.112	.031	.046
子どもの人数	.171 *	-.060	.074	-.101	.148	-.050

*1 100点を満点として採点を求めた満足度

*2 Nakagawa[Kazui], Teti, & Lamb(1992)が作成したMarital-Dyadic Adjustment Scale(MDAS)を数井が翻訳した日本語版を一部変更した21項目からなる、夫婦関係の調和度を測定する尺度の合計点

*3 自己評定による分担割合

「1.社会が半分型」では、夫婦双方の「夫婦関係の調和度(MDA)」^(注2)の得点が、「不安・焦燥」と負相関を示した。配偶者との関係がうまく行っているという認識が高いほど、自分の生き方に対する不安が低いことを示す。

さらにこのタイプでは、夫婦の「年収」が低いほど、また子どもの数が多いほど「不安・焦燥」が高いという結果も見られた。つまり、このタイプの男性の「自分の生き方に対する不安」は「生活の不安」と結びついていると言えるのではないか。近年、社会経済全体の落ち込みによって、リストラやサービス残業等、労働者にとっての職場環境は厳しさを増している。その中で、仕事に対して持てるエネルギーの半分しか投入していなくても、十分な収入があるなら切実な不安を感じることはないだろう。夫婦の年収すなわち家庭全体の収入が多いほど「自己依拠」が高まるという結果は、生活の不安がなければ、「仕事だけでなく家庭や趣味も」という自分の生活スタイルを肯定的に捉えられることを示すと考えられる。しかし、もしも収入が十分でなく生活に不安を感じるようであれば、仕事に全力を尽くしていない自分の生活スタイルは「このままでよいのか」という不安を掻き立てるだろう。自分より妻の年収額のほうが、「不安・焦燥」との相関係数が高い値をとるのは、妻が働いて収入を得ていることが「自分が一人で一家の生活を支えているわけではない」という安心感につながっていると解釈することもできるのではないか。

「3.社会メイン型」では、夫婦双方の「夫婦関係の調和度(MDA)」の得点が、「不安・焦燥」と負相関を、夫のMDAが「自己依拠」と正相関を示した。仕事中心の生活を送りながらも、妻とじっくりいっしょに感じられる限りは、自分の生き方に問題は感じないのだろう。また、「情緒」分担率と「不安・焦燥」の負相関から、自分は家事や育児の分担はできなくとも、家族に対するメンタルな配慮をしていると認識しているほど、不安が低いことが読み取れる。逆に言えば、自分が情緒面での配慮すらしていないと感じた場合には、「自分の生き方はこれでよいのか」という焦りが生じるといえるだろう。妻の労働時間が「自己依拠」と負相関の関係にあるのは、妻の就業が短時間のパート程度でなく本格的であればあるほど、家庭への物理的なコミットメントをしない自分の生き方に「問題なし」と目をつぶることができなくなるためではないか。

「7.家庭=社会型」では、「自己依拠」が家庭へのコミットメントを表す変数との間で有意な相関を示した。「自己依拠」の項目内容を考えると、価値観に基づいて行動するこのタイプの特徴がよく現われていると言える。

考 察

男性にとって、従来は異性役割とされてきた家庭役割へのコミットメントがどのような意味をもつかを検討するために、仕事と家庭へのコミットメントのバランスが異なる3タイプの比較を行った。

3タイプのうち、「7.家庭=社会型」は、エネルギーのほとんどを仕事と家庭生活に均等に二分しており、現実に家事や育児の分担率も高い。だが彼らは、必要に迫られて仕方なく家庭役割を果たしているのではない。自分の価値観に基づいて、いわば確信的に従来の異性役割を生活に組み込んでいる男性である。現実と理想のずれの大きさの分析から、最も理想に近い生活を送るグループであると

も言える。

それに対して「3.社会メイン型」は、仕事中心の典型的な企業戦士のグループである。家事・育児の分担や家族と過ごす時間は少なく、家庭との関わりは稼ぎ手役割としての貢献が中心であるが、理想的には、仕事へのエネルギー投資を減らして家庭生活へのコミットメントをもっと増やしたいと考えている。このタイプは他の2タイプより、若干「不安・焦燥」を高く感じている。この「不安・焦燥」は夫婦関係の調和度や家族に対する情緒的な面での関わりと結びついている。物理的な関わりのお少なさに加え、「家族との気持ちのつながり」さえ危うくなると、「自分の生き方はこのままでよいのか」という迷いが強くなると考えられる。

多角的な分析を総合すると、「3.社会メイン型」に比べて「7.家庭=社会型」のほうが、自分の人生に対して肯定的な認識・感情を持っていると考えられる。しかし「不安・焦燥」「自己依拠」をタイプ間で比較した結果(図4)は、「自己依拠」にはタイプ間の差が見られず、「仕事ばかりの生活を送る男性は自分の生き方に確信を持っていない」と結論づけるに十分なほど明確な差とは言い難い。これは1つには、多くの男性にとって、依然として稼ぎ手役割の責任の自覚が大きいためではないだろうか。

「7.家庭=社会型」の男性は、年収という指標で見ると、職業上の達成をある程度犠牲にして家庭にコミットしていると言うことができる。「性別によらず夫婦は共に家事・育児を担うべきだ」とする共同参画という信念に支えられている群だからこそ、自己の生き方に迷いを抱かずになんか行動がとれるのだと考えられる。しかし、性別分業について、一般的な価値観や個人的な好み以上の特別に強い信念を持たない男性にとっては、「男は働いて家族を養うものだ」という従来の性役割に従って、稼ぎ手役割を自分の当然の責任として引き受けるだろう。多くの調査が示すように、性別分業にまつわる価値観は女性より男性のほうが伝統的であることを考えると、稼ぎ手役割を他の何にも優先して果たしていくことに満足感や効力感を感じる男性は、現在でも少なくないのではないだろうか。「1.社会が半分型」の男性の不安が家庭の経済的な状況と関連していたことも、「稼ぎ手役割の責任の重さ」の一端が表れたと考えることができる。

「7.家庭=社会型」のような価値観の裏づけのないまま、必要に迫られて家庭領域にコミットすることが男性にとってどのような意味を持つのかは、本稿の分析からは明らかにできない。新谷・村松・牧野(1993)や柏木・若松(1994)が子育て経験について行ったような、発達的な視点を含んだ研究が必要であろう。

明確な結果が得られなかった2つ目の理由は、男性がどの程度家庭にコミット可能かは、男性個人の意識の問題であるのみならず、職場環境や労働条件にも影響されることが考えられる。個人の置かれた状況に関するきめ細かいデータが得られないのは、今回のような質問紙による大規模調査の限界である。家庭環境、職場環境、個人の価値観やその背景などを含めた深層インタビュー等によるさらなる検討が求められる。

注1)この質問は、本調査においては、本稿の分析対象である育児期男性の他、育児期女性、中年期男女、大学生にも共通する項目であったために、「社会的活動(仕事, 学校, ボランティアなど)」という表現にした。本稿では、育児期男性のライフステージに鑑み、社会的活動=仕事と解釈して分析・考察を行う。

注2) 「仕事に対する満足度」「家庭生活に対する満足度」「夫から見た夫婦関係の調和度(MDA)」「妻から見た夫婦関係の調和度(MDA)」には、タイプ間の統計的有意差は見られなかった。

引用文献

- 朝日新聞社会部(編).(1999). どうするあなたなら 家族. 東京:朝日新聞社.
- 土肥伊都子・広沢俊宗・田中國夫.(1990). 多重な役割従事に関する研究. *社会心理学研究*, **5(2)**, 137-145.
- 福丸由佳.(2003). 父親の仕事と家庭の多重役割と抑うつ度 妻の就業の有無による比較 . *家族心理学研究*, **17(2)**, 97-110.
- 福丸由佳.(1997). 子どもとの関わりと父親の発達 都市部と郡部の地域差の検討 . *母子研究*, **18**, 60-68.
- 岩間暁子.(1997). 性別役割分業と女性の家事分担不公平感. *家族社会学研究*, **9**, 67-76.
- 柏木恵子(研究代表者).(2003). *社会変動・家族・個人の発達に関する発達・文化心理学的研究 「関係性」・「個人化」の文化間および文化内比較* . 平成12年度～平成14年度科学研究費(基盤研究(B)(1))研究成果報告書.
- 柏木恵子.(1999). 社会変動と家族の変容・発達. 東洋・柏木恵子(編) *社会と家族の心理学* (pp.9-15). 京都:ミネルヴァ書房.
- 柏木恵子・若松素子.(1994). 「親となる」ことによる人格発達:生涯発達の視点から親を研究する試み. *発達心理学研究*, **5(1)**, 72-83.
- 諸井克英.(1996). 家庭内労働の分担における衡平性の知覚. *家族心理学研究*, **10**, 15-30.
- 永久ひさ子.(2003). 専業主婦の焦燥感. 藤田達雄・土肥伊都子(編). *女と男のシャドウ・ワーク*. 京都:ナカニシヤ出版, 53-72.
- 落合恵美子.(1997). *21世紀家族へ 家族の戦後体制の見かた・越えかた*. 東京:有斐閣.
- 大野祥子・田矢幸江・柏木恵子.(2003). 男性の家事分担を促進する要因. *発達研究*, **17**, 53-68.
- 大野祥子・菅野幸恵・柏木恵子.(2002). 家庭内の家事分担と家族の属性の関連. *発達研究*, **16**, 53-68.
- 大野祥子.(2001). ライフコースの選択. 柏木恵子・伊藤美奈子(編). *女性のライフデザインの心理 自分らしい生き方を考える*. 東京:大日本図書, 53-74.
- 新谷由里子・村松幹子・牧野暢男.(1993). 親の変化とその規定因に関する一研究. *家庭教育研究所 紀要*, **15**, 120-140.
- 末盛慶・石原邦雄.(1998). 夫の家事遂行と妻の夫婦関係満足感 NHFH(National Survey of Families and Households)を用いた日米比較 . *人口問題研究*, **54(3)**, 39-55.

< 付 記 >

本調査の計画，実施，分析は，筆者らの他に，菅野幸恵（青山学院短期大学），田矢幸江（白百合女子大学）が参加した。

附表1. 「個人としての自己実現」尺度 因子パターン行列

項 目	F1 不安・焦燥	F2 自己依拠	F3 集団志向
自分の人生はこのままでいいのかと不安になる	.81	.15	.06
自分の生きるべき道が見つからない	.74	-.03	-.01
本当にやりたいことをやっていないという不満や焦りを感じる	.72	.28	.03
自分が本当に何をやりたいのかわからない	.62	-.16	.06
私なんて、いてもいなくても同じだと思うことがある	.56	-.05	-.04
さまざまなしがらみがあって自由でない	.46	-.00	.02
自分はどうせたいしたことはできないと思う	.42	-.28	.04
周りと反対でも、自分が正しいと思うことは主張できる	.21	.80	-.22
自分の信念に基づいて生きている	.01	.77	-.02
自分がやりたいと思ったことは周囲の人に反対されてもする	.21	.63	-.14
自分の個性を活かそうと努めている	-.01	.60	.17
自分の心に正直に生きている	-.19	.52	.05
自分の人生を生きているという実感がある	-.27	.43	.22
どんなことがあってもやめたくない、と思うものがある	-.06	.43	.20
自分が成長し、人間的な魅力を増しているという実感がある	-.09	.40	.22
誰かと一緒にないとさみしくなってしまう	.18	-.04	.57
人と一緒にいることや、一緒に行動することが好きだ	.01	.16	.54
周囲の人と違うとなんとなく不安になる	.33	-.24	.41
係数	0.80	0.79	0.53

附表2. 男性の生活スタイルの7クラスター3側面への現実のエネルギー投入割合の平均(SD)と人数

クラスター	1	2	3	4	5	6	7
タイプ名	社会が半分型	家庭 = 個人型	社会メイン型	均等型	個人メイン型	家庭メイン型	家庭 = 社会型
社会的活動	5.52 (.65)	1.00 (.72)	7.42 (.64)	3.08 (.58)	0.64 (.50)	0.88 (.79)	4.53 (.67)
家庭生活	2.66 (.70)	4.39 (.57)	1.65 (.66)	3.58 (1.12)	1.18 (.75)	7.27 (1.05)	4.59 (.67)
個人的活動	1.81 (.69)	4.61 (.79)	0.93 (.54)	3.36 (1.04)	8.18 (1.08)	1.85 (.87)	0.88 (.32)
中年期N(%)	45 (31.5)	13 (9.1)	42 (29.4)	22 (15.4)	2 (1.4)	12 (8.4)	7 (4.9)
育児期N(%)	159 (30.9)	15 (2.9)	161 (31.3)	44 (8.6)	9 (1.8)	55 (10.7)	71 (13.8)

